

# 宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

第 18 集



1 9 9 2

宇治市教育委員会



## 序

近年、宇治市では宅地開発を始めとする開発があいつぎ、それに伴い実施する埋蔵文化財の発掘調査が増加をしております。

平成2年度において、本市が手掛けましたこれらの開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査や立会調査は30件におよびます。

本書は、本市教育委員会が平成2年度において実施した埋蔵文化財の調査のうち、開発に伴う緊急発掘調査の成果を中心に収録したものです。本書が多くの方々の目にふれ、宇治の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施についてご理解・ご協力いただきました開発事業者の方々を始め、調査期間中や整理期間中にご指導賜りました関係各位にたいして心よりお礼を申し上げます。

平成4年3月

宇治市教育委員会

教育長 岩本昭造

## 目 次

1. 若林遺跡発掘調査概要	3
2. 宇治市街遺跡(壱番67)発掘調査概要	14
3. 西浦遺跡(西浦50の1)発掘調査概要	21
4. 矢落遺跡(矢落34)発掘調査概要	27
5. 平成2年度の動向	30

## 例 言

1. 本書は、平成2年度において宇治市教育委員会が実施した開発に伴う緊急発掘調査の成果の概要を収録したものである。

2. 調査の体制は以下のとおりである。

発掘責任者	宇治市教育委員会	教育長	岩本昭造
発掘担当者	同	社会教育課主事	杉本宏
	同		荒川史
事務局	同	参事	頼成綾子
	同	社会教育課長	池田正彦
	同	文化係長	吉水利明
	同	社会教育課主任	山本敦子

3. 本書の編集は社会教育課が行い、編集実務・執筆を杉本が担当した。

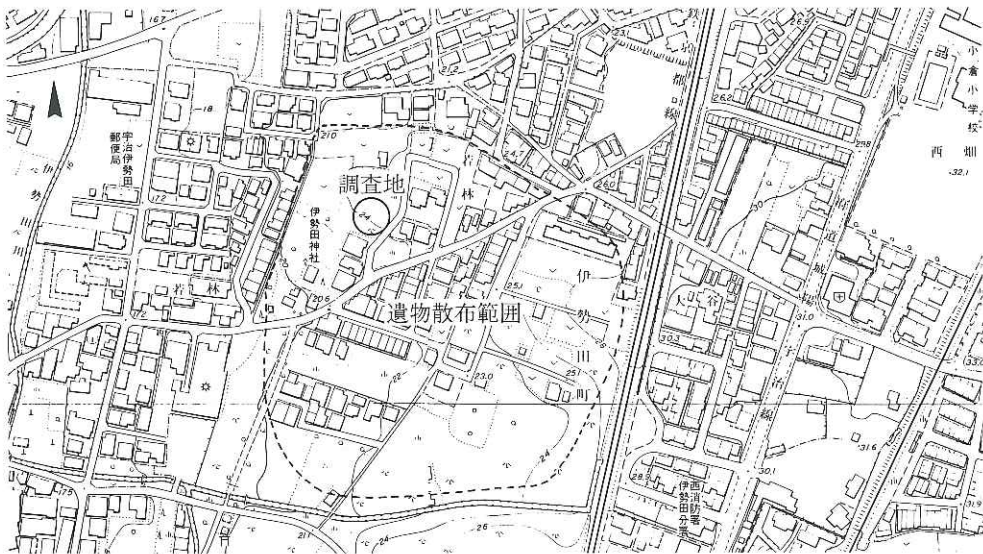
# 1. 若林遺跡発掘調査概要

## A. はじめに

ここに報告をするのは、宇治市伊勢田町若林14・15-1番地において実施した、若林遺跡発掘調査の概要である。

若林遺跡は宇治市西部、旧久世郡域に存在する遺跡で、伊勢田町若林一帯に土器の散布が確認されている。地形的には、宇治丘陵の西北端部にあたり、北に巨椋池干拓地を西に木津川によって形成された平野部を一望のもとに見わたせる所である。遺跡の標高は、20~28m程を測り、西側平野部と比高は4~12m程である。当遺跡での土器等の確認は比較的古くよりされており、伊勢田神社を中心に土師器・須恵器片が採集されている。特に神社北側の畑地との境には、遺物包含層の露出が認められる。当遺跡については、今回の発掘調査に至るまで、考古学的調査が全く実施されておらず、その性格については不明な点が多かったが、遺物の状況から弥生時代から古墳時代にかけての集落跡を想定してきた。今回の調査は、共同住宅建築に伴う緊急発掘調査であり、事業者よりの受託事業として本市教育委員会が実施した。調査面積は350㎡、調査期間は平成2年11月19日より同年12月12日までである。

なお、調査にあたっては、事業者の天野富三氏を始め、北川純三氏・赤沢浩平氏・大谷若林町内会・伊勢田史友会のご協力をいただいた。記して感謝する。



第1図 若林遺跡調査地位置図

## 1. 若林遺跡発掘調査概要

### B. 調査の概要

調査地は、伊勢田神社の北東隣接部にあたり、調査前は竹林であった。当地は、若林遺跡範囲を東西方向にはしる小丘陵の西端付近であり、標高は南側で23.5m、北側で24.5m程を測る。ゆるやかな南下りの所である。調査地の南・東側は道路によって旧地形が切断されており、西・北方向に向って主に畑地として利用される旧地形が残っている。

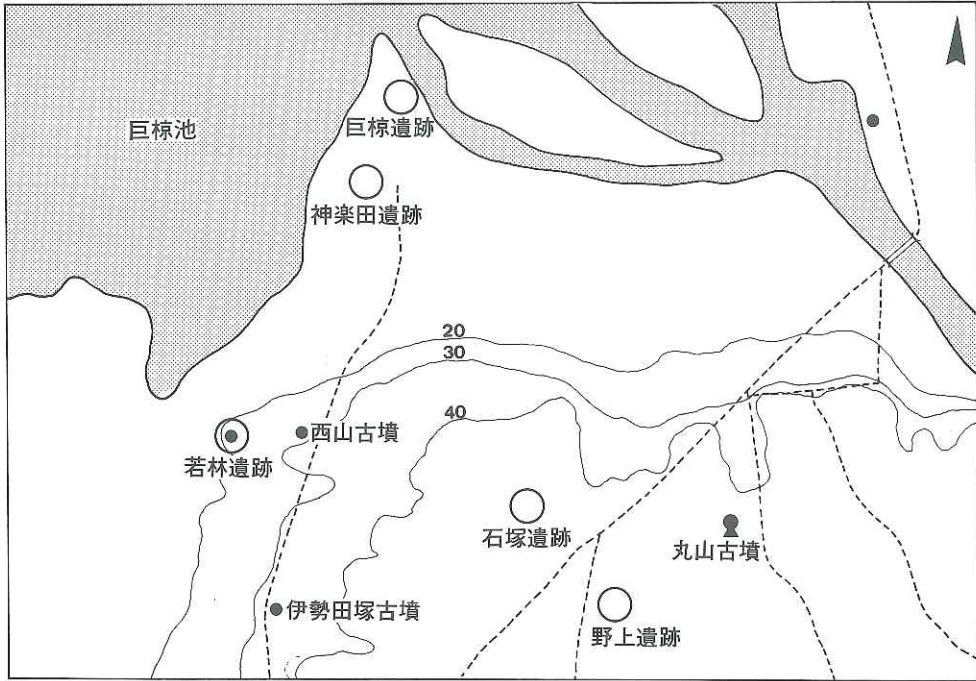
調査は、開発に伴う竹林伐採と抜根後に、東西約17m、南北約20mの長方形の調査区を設定し、作業を開始することとした。

調査地は、表土下の薄い漸移層を除去すると直ちに赤褐色の地山があらわれ、遺構はこの地山面上で確認できた。遺物は漸移層中に少量含まれるが、主として遺構内より出土した。遺構埋土は概ね淡褐色土である。

検出した遺構は、弥生時代の溝・古墳時代の土壙墓・竪穴住居及び古墳である。しかし、いずれの遺構も後世での土地利用によって削平を受けており、さほど深いものではない。では、以下に遺構・遺物について説明を加えることとしよう。



第2図 調査地付近地形図



第3図 巨椋池南岸の弥生遺跡と古墳 (1 : 30,000)



第4図 伊勢田神社

## 1. 若林遺跡発掘調査概要

### C. 遺 構

今回の調査で検出した遺構は、溝1、土壙墓2、土壙1、堅穴住居1、古墳1である。しかし、いずれの遺構も調査地外へと続くものであり、全体を窺えるものはない。また、攪乱は、調査地南西部に2箇所認められただけであり、埋没深度が浅いわりには遺構遺存状況は良好であった。検出遺構を時代別に分けて説明する。

#### (弥生時代)

溝SD01 弥生時代遺構として確認できるのは、調査地北半を東西方向に直線的にはしる溝SD01だけである。溝幅約2m、深さ約30cm程の「U」字溝である。埋土中から弥生土器少片と石鏃が出土しているが、土器片よっての時期判別は難しい。後述する古墳SX02周濠内出土の弥生土器が主に後期のものであるため、溝SD01もこの時期に想定をしておきたい。

#### (古墳時代)

古墳SX02 調査地南半で検出した方墳であり、周濠のみが遺存する。周濠は、幅2.5～3.5m程を測り、深さは30～40cm程である。周濠の調査地内での検出形状は、ややいびつな「L」字形を呈しており、全周の概ね4割程を検出したこととなる。周濠から類推できる古墳の規模は、一辺14m程となる。

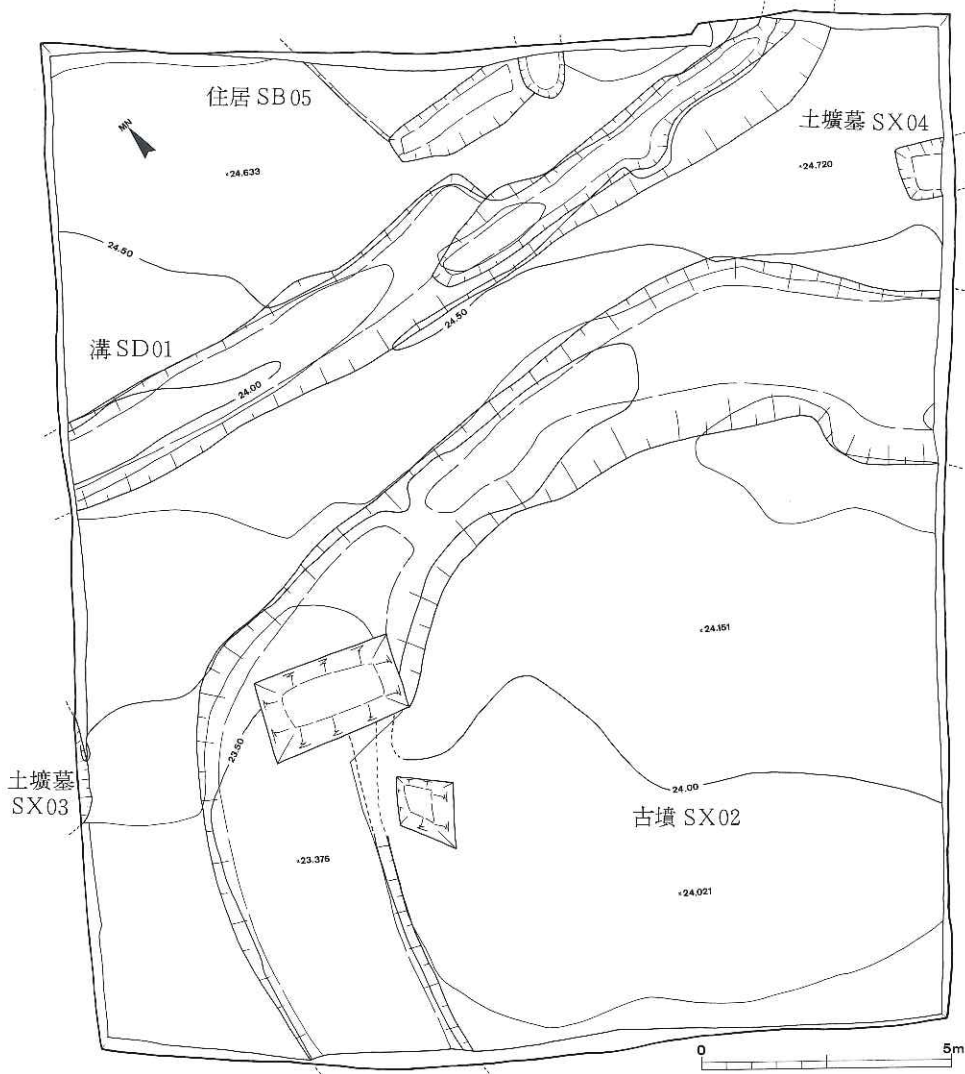
墳丘部分は、過去の耕作等により完全に削平されたと判断でき、墳丘部では埋葬施設を思わせる土色変化は確認できなかった。

周濠内からは、少量の弥生土器を始め須恵器甕体部片・須恵器短頸壺(第11図4)が出土しており、年代的には後述する土壙墓と同じく6世紀中頃を想定したい。

土壙墓SX03 調査地西南トレンチ壁部で一部を検出した土壙で、状況的に土壙墓と判断できる遺構である。竹根の伐根時に完形品を含む須恵器杯3個体(第11図1～3)が壁面にあらわれ、直ちに精査を行ったところ、土壙中の底より若干上にこれら須恵器がまとまって置かれていた状況が看取でき、この遺物群は土壙墓の副葬品であることが理解できた。土壙墓の範囲は大半が調査地外となり、残念ながら規模については不明である。年代的には須恵器の型式から6世紀中頃と判断できる。

土壙墓SX04 調査地の北東トレンチ端部分で検出した土壙で、状況的に土壙墓と判断できる遺構である。表土除去後に赤褐色の地山を穿った遺構として検出した。幅は1.2m程を測り、検出長は1m程である。長方形を呈すると思われるが、大半はトレンチ外である。深さは30cm程である。埋土中から滑石製紡錘車(第11図5・第13図)1個が底面から遊離した状況で出土した。





第5図 調査地全図

(時期不明)

住居SB04 調査地北端中央部で一部を検出した遺構。平面方形プランの竪穴住居の一角と思われる。深さは10~15cm程である。南辺部が深さ30cm程に深く掘り込まれている。埋土中からは土器小片が若干出土したが時代判別はできない。床面上には土器は認められなかった。

このような状況から、時代決定は難しいが、今回での遺物は弥生時代後期と古墳時代後期に限られ、遺構の状況からは前者に所属する遺構の可能性が高い。

1. 若林遺跡発掘調査概要



第6図 調査地全景(北から)



第7図 古墳S X 02周濠(東から)



第8図 土壙墓 S X 03須恵器出土状況(東から)



第9図 土壙墓 S X 04紡錘車出土状況(西から)

## D. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物の種類は、石器・弥生土器・須恵器・石製品であり、数量的には整理箱2箱分程である。遺物の遺存状況は、土壙墓出土遺物以外は破片化が著しく、所属時期を決定し難いものが多い。しかし、全体的な状況を見る限り、弥生時代後期と古墳時代後期にほぼ限定できる遺物群である。

以下に遺構別の出土遺物の概要を記述する。

**溝S D01出土遺物** 本遺構内からは土器少片少量と石鏃等が出土している。須恵器は認められない。土器は甕・壺等の体部小片で、外面にハケ目を残すものがある。但し風化が進行しており、器面調整を観察できるものは極めて少ない。

石鏃(第10図1)は、サヌカイト製の凹基式打製石鏃である。

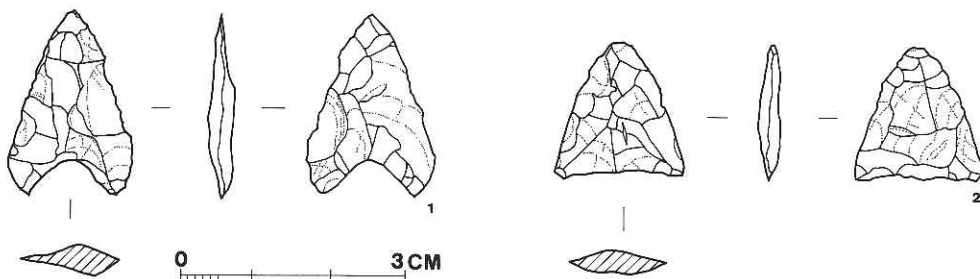
**古墳S X02出土遺物** 溝の埋土中から弥生土器片・須恵器が混在して出土しており、出土量は整理箱1箱分程である。

弥生土器はいずれも少片で図化できるものは少ない。破片を観察すると器壁表面にハケ目を有すものやタタキ目を有すものが見られる。また、弥生後期に通有な器台片も見受けられるため、これらの土器の所属時期は弥生後期と見て良い。

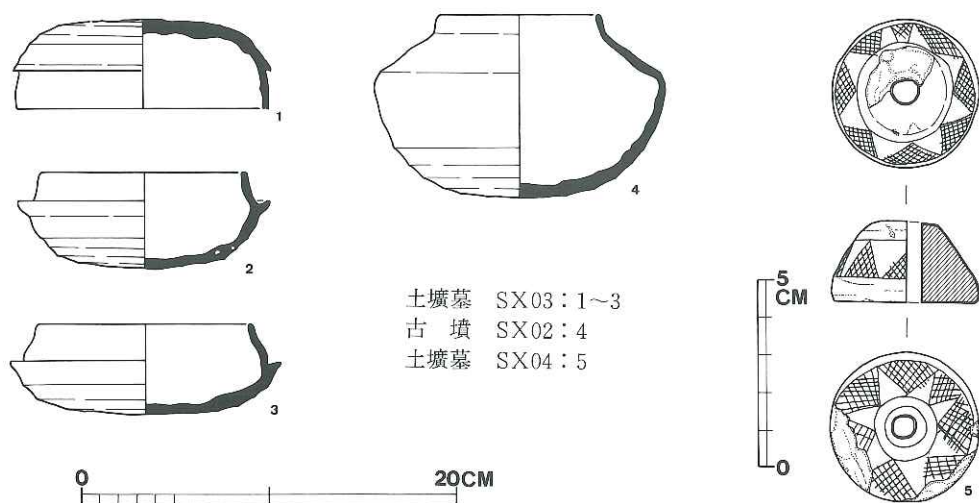
須恵器は大半が甕か壺の体部片であり所属時期は明らかでない。但し、調査終了後、溝の延長部に相当するところから、ほぼ完形の須恵器の短頸壺(第11図4)が採集されている。出土状況の詳細は明らかではないが、聞く限りこの溝埋土の可能性が高いため、ここに図示しておく。年代的には6世紀中頃に比定できるものである。

**土壙墓S X03出土遺物** 埋土の底面よりやや上位で須恵器杯蓋1個体(第11図1)と須恵器杯身2個体(第11図2・3)の計3個体が出土した。土圧により割れていたものもあるが、いずれも完形品である。

杯蓋は、口径13.5cm、器高4.8cmを測るもので、口縁端部は角ばる。天井部には回転ヘラ



第10図 石鏃実測図



土壙墓 SX03:1~3  
古墳 SX02:4  
土壙墓 SX04:5

第11図 古墳・土壙墓出土遺物実測図

ケズリが施される。杯身(2)は、口径11cm、器高5cmを測るもので、口縁端部は角ばる。底部に回転ヘラケズリが施される。杯身(3)は、口径11.4cm、器高4.8cmを測るもので、口縁端部を丸くおさめる。底部に回転ヘラケズリが施される。これらの須恵器は焼成は良好で焼き歪みはない。形態的には大阪陶邑のMT10号窯出土例に類似し、年代的には6世紀中頃に比定できるものである。

土壙墓SX04出土遺物 滑石製の紡錘車(第11図5・第13図)が1個体出土している。裁頭円錐形を呈するもので、底径4cm、上面径1.8cm、高さ2.2cmを測る。中心部には直径0.6cmの孔が穿たれている。側面中央部分には、浅い刻みによる鋸歯文8個が施文され、底面にも内行する同様な鋸歯文が7個施文されている。破損はないが、底面及び上面の一部に目目にそった薄い剝離が認められる。時期的には、古墳時代後期に所属するものと思われる。

住居SB05出土遺物 土器細片が少量出土しているが、詳細は判別できない。また、本遺構からは石鏃(第10図2)が1個体出土している。サヌカイト製の平基式打製石鏃である。

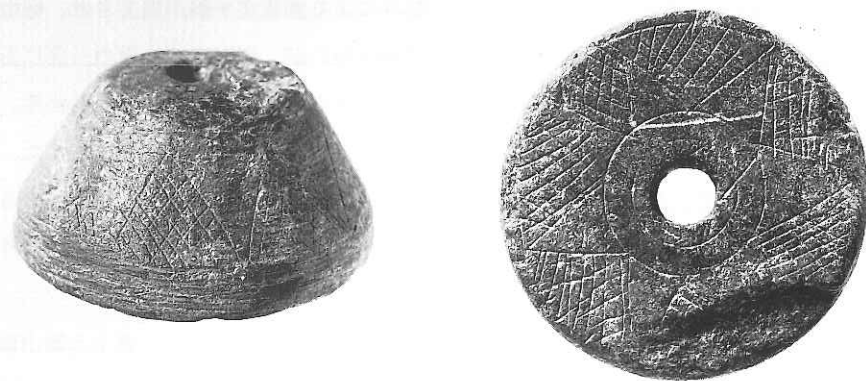
その他の出土遺物 図示していないが、表土排除中に須恵器甕片数点と中世の瓦器片が出土した。

このように、今回の遺物は、遺跡全体がかなり削平されていることと、表土と地山面との間に遺物包含層が形成されていないことにより量的に少なく、全体を知り得るものも極めて少ない。しかし、前述したごとく、遺物の所属年代は概ね弥生時代後期と古墳時代後期に限定され、本遺跡の形成がそれぞれの時代に断続的に行われたことを示している。

1. 若林遺跡発掘調査概要



第12図 土壙墓 S X03出土須恵器



第13図 土壙墓 S X04出土紡錘車

## E. ま と め

今回の発掘調査で得られた成果は既に述べてきたとおりである。面積的には限定されたものではあったが、今までその内容が不明であった本遺跡の内容の一端が明らかとなり、その点で注目すべきものであったと考える。ここでは、前述の成果を再度整理し、まとめとした。

## (弥生時代の集落)

遺構としては良好なものの検出はなかったが、断片的な検出遺構及び出土遺物よりは、この遺跡の始まりが弥生時代後期であることが推測できる。おそらく、集落跡と見てよい。

宇治市西部での当該期の集落の発見例は極めて少なく、その点において、今回の発見は新たな弥生集落の確認として、大きな意味をもつと考える。今回の調査地点は、当該時期の本遺跡の中心部分とは考え難く、今後、周囲での開発に注意し、その内容解明に努めてゆきたい。

## (後期の若林古墳群)

当地は、古墳時代における京都最大の古墳群である久津川古墳群(城陽市平川周辺)の北辺部にあたる。しかし、この周辺で今も目にすることのできる古墳は極めて少なく、従来より古墳空白地帯として把握されてきた。しかし、今回の発見によって、古くに削平された古墳がこの辺りに存在することを確認できたのは、当地での古墳の展開を考える上で興味深いことと考える。当地では、古くより完形の須恵器が採集されており、今回の調査成果とを兼ね合わせて考えると、付近には複数の削平された古墳と土壙墓が展開していることは間違いない。この古墳群を「若林古墳群」と呼びたい。

若林古墳群のように、地形上何の痕跡も認められない所から発掘によって新たな古墳が確認される事例は、久津川古墳群周辺及び宇治市東部でも増加をしており、これらは、おそらく通例の古墳のような高い墳丘をもつものではなく、低い墳丘を持つ所謂「低墳丘古墳」のカテゴリーに入るものと類推されている。このような古墳の在り方は、近年の発掘調査の進展によって注目されるようになったものであり、若林古墳群もおそらくこの「低墳丘古墳」を主体としたものと想定でき、今後、その実態究明により当地での古墳の在り方の具体相を明らかにしてゆきたい。



第14図 若林遺跡採集の須恵器  
(北川純三氏蔵)

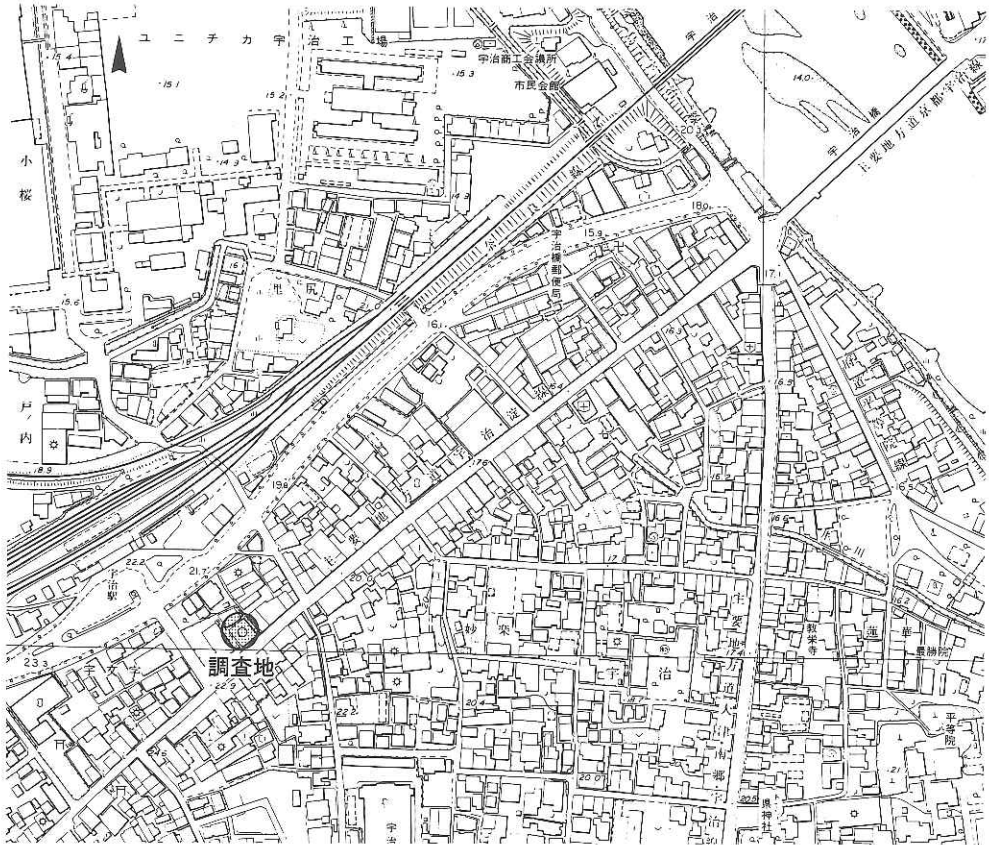
## 2. 宇治市街遺跡(壱番67)発掘調査概要

### A. はじめに

ここに報告するのは、宇治市宇治壱番67・68の2、宇文字17の6番地において実施した、宇治市街遺跡発掘調査の概要報告である。

宇治市街遺跡は、現宇治市街地一帯に展開する古墳時代から近世に至る集落遺跡であり、過去に複数回発掘調査を実施している。今回の発掘調査は、宇治市農業協同組合が計画した宇治支店屋舎建設に伴う事前調査として実施した。当該地は宇治橋通りに面した宅地であり、木造2階建の建物撤去後に調査を開始した。調査期間は平成2年9月25日より10月6日までを現地調査に費し、60㎡を発掘調査した。

なお、調査にあたっては宇治市農業協同組合のご協力を得た。記して感謝する。



第15図 調査地位置図

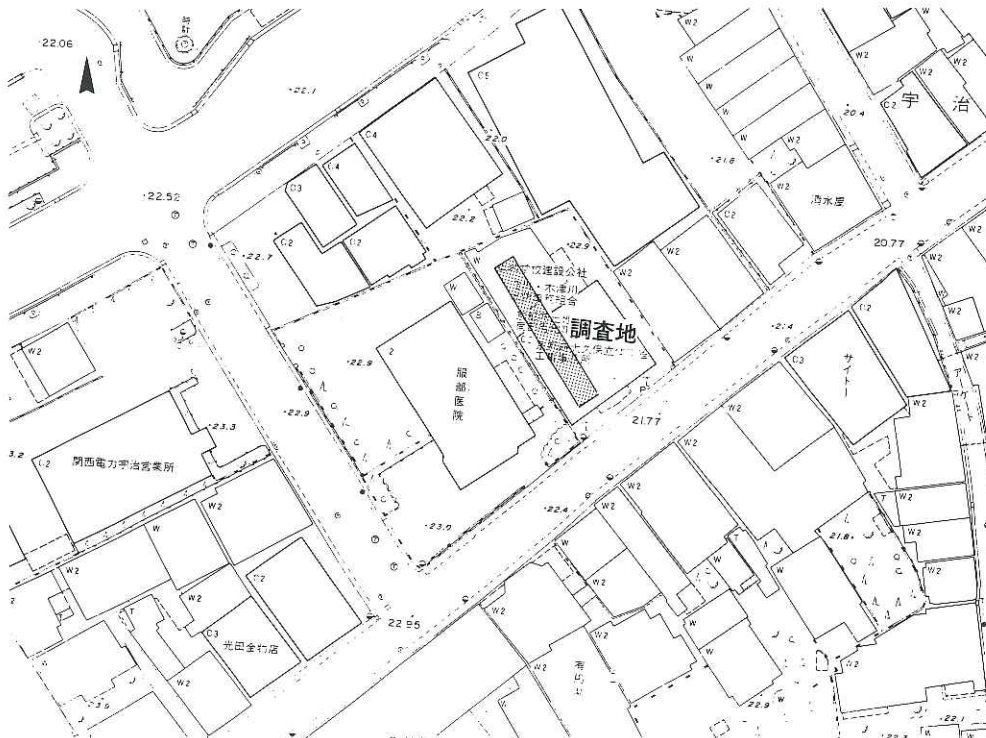


## B. 調査の概要

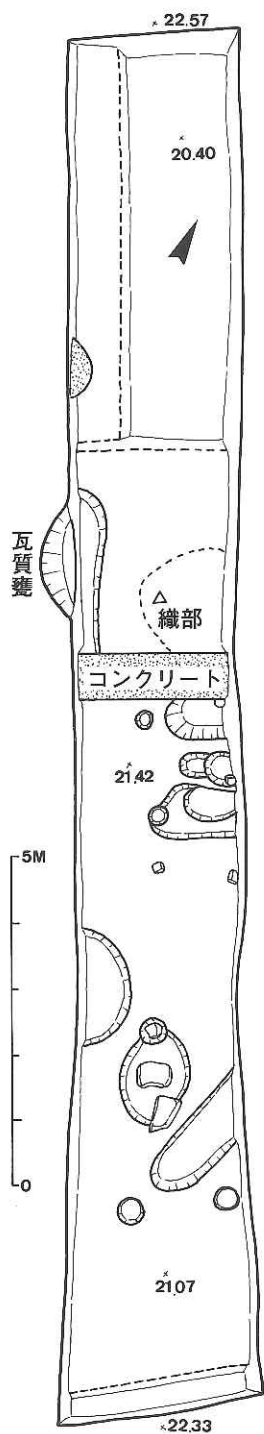
宇治橋西詰より西南方に真っすぐ通じる宇治橋通り(新町通り)は、本町通り・県通りなどとともに現宇治市街(旧宇治郷)を通る主要道であり、今回の調査地はこの宇治橋通りに面する地点である。江戸期では、これらの道ぞいに茶師の家屋が建ちならんでおり、当該地は菱木家邸の一角であったことが知られる。

発掘調査は、木造家屋撤去後、まず宇治橋通りに直行する形で調査区(3m×20m)の設定を行った。

調査区(トレンチ)の掘削は、まず重機にて開始をした。表土除去後直ちに火災層を確認したが、当層上での遺構検出は難しいと判断できたため、更に掘削を行い、地表下1.2m地点で砂質土層に穿たれた安定した遺構面を検出した。遺構検出は当層上面で行い、全体的な遺構検出後、北部で断ち割りを行い下層遺構の有無確認を実施した。しかし、遺構検出面より約1m掘り下げた段階で湧水があり作業を中止したが、ここまでの間では遺構面らしきものは存在していなかった。遺構の掘削が終了した後、測量による平面図作成と土層状況の調書及び写真撮影を行い、発掘調査を終了した。



第16図 トレンチ配置図(1:1,000)



第17図 調査地全図

## C. 遺 構

今回の調査で検出した遺構及び土層の状況、遺物の出土状況について、以下に記述する。

### (土 層)

土層は厚さ15cm程の表土を除き、上からⅠ～Ⅳ層までに大きく分けることができる。

Ⅰ層は厚さ15～40cm程の火災層で、焼けた壁土を始め近世陶器・信楽焼茶壺片を多く含む。江戸前期の火災によって形成されたものである。

Ⅱ層は近世初頭頃の整地土であり、淡褐色系土色である。層厚40cm程であり、若干の陶器を含む。

Ⅲ層は瓦器碗・土師皿小片を含む暗褐色系土であり、厚さ30cm程を測る。この上面はある時期の遺構面であり、当層を穿った浅い土壌より後述する織部茶碗が出土した。

Ⅳ層は淡褐色砂質土であり、今回の遺構検出面である。当層は厚さ40cm程を測り無遺物である。この下層も砂質土が続き、遺物は含まれない。

### (遺 構)

今回検出した遺構は、Ⅳ層上面で検出したものであり、14世紀を中心とする遺構が主体である。遺構の種類は、柱穴・土壇・溝等であるが、調査面積が狭いため全体的な様子については復元ができない。但し、柱穴には底部に偏平な礎石を用いており、これらが家屋に伴う柱跡であることは間違いない。遺構埋土からは土師皿小片が出土しているが、これによって詳細な時期を確定することは難しい。遺構面の標高は21m程であり、調査地前面の宇治橋通りの現在高より約1m程低いこととなる。

また、遺構としては面的に把握できなかったが、Ⅰ層下層において、トレンチ北西壁ぞいで瓦質の甕を埋めたものと、Ⅱ層下層において、織部茶碗を含む不定形土壌を確認した。いずれも近世のものである。



第18図 調査地全景(北から)



第19図 調査地全景(南から)

## D. 遺 物

今回出土した遺物は、土師器・瓦器・陶器・磁器などの種類があり、量的には整理箱5箱分が出土している。年代的には14世紀代(中世)と17世紀代(江戸前期)とに分けることができる。

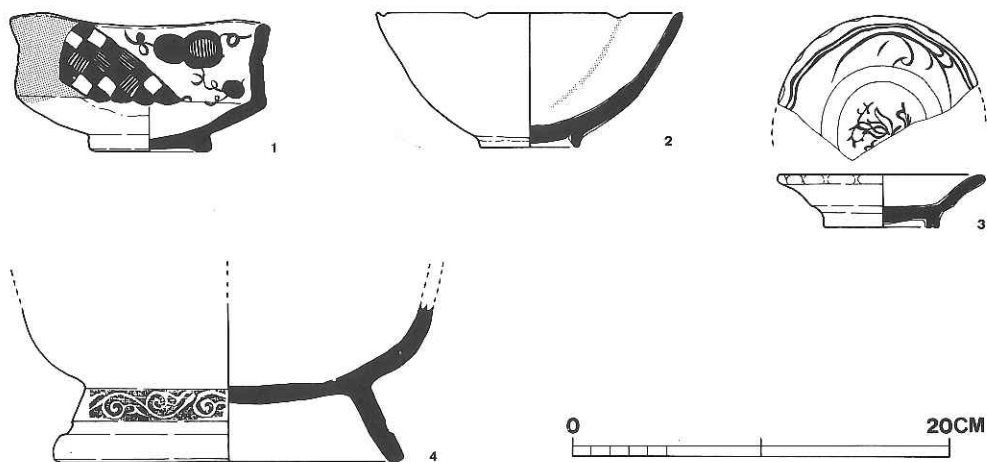
### (中世の遺物)

中世の遺物には、土師皿・瓦器・青磁などがある。土師皿・瓦器碗は細片化しており全体を窺えるものはない。輪花状口縁をもつ青磁小皿(第20図3)は当期のものともてよい。

### (江戸前期の遺物)

江戸前期の遺物は今回出土遺物の大半を占め、その中で最も多かったのが信楽焼の鉄釉四耳壺片である。大半がⅠ層からの出土である。この壺は、腰白とも呼ばれるもので、近世において茶壺として多用されたものである。第20図2の輪花口縁の青磁碗や同図4の瓦器底部片も当該期のものである。

今回の出土遺物の中で注目すべきは、Ⅱ層下で出土した織部茶碗(表紙口絵・第20図1・第21・22図)である。一般的に黒織部杓形茶碗と称されるものである。織部焼は、豊臣の武将であり茶人でもあった古田織部の好尚によって美濃で生産された陶器で、自由な作風が特徴とされる。概ね慶長から元和にかけて、実年代では1596年から1624年頃の間で多くが生産されたようで、本品は黒織部杓形茶碗の中でも後半期の作風を留める。本品が出土した層位は、後述するように寛文10年(1670)かもしくは元禄6年(1693)・元禄10年(1697)の火災によって形成されたⅠ層火災層下であり、廃棄された年代は製作年代に近い。



第20図 出土遺物実測図



第21図 織部杏形茶碗(正面)



第22図 織部杏形茶碗(底面)

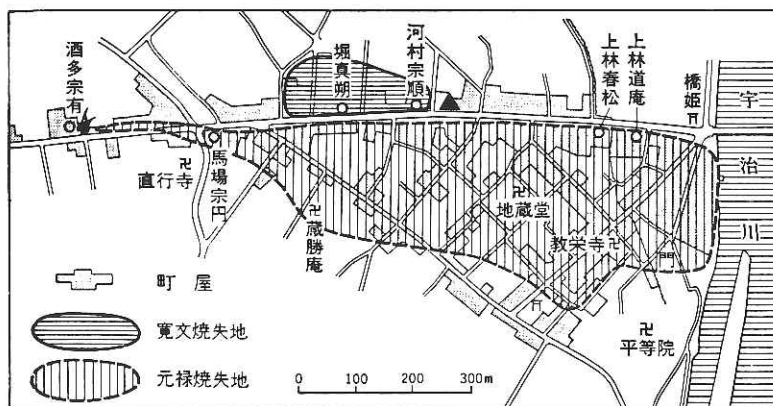
## E. ま と め

今回の調査成果を述べてきたが、ここで整理をしまとめとしたい。

宇治市街遺跡については昭和56年以來、7回の発掘調査と多数の立会調査を実施してきたが、各地点ごとに遺跡の状況は一樣ではなく最も古い遺構は古墳時代後期から平安時代まで多様である。ただし、中世以降のものについては各地点において普遍的に認められ、当遺跡の画期が中世にあることはほぼ認めてよい。

今回の調査において検出したⅣ層上面での遺構も中世期のものであり、この時期において急速に集落が発展する宇治市街遺跡の有様の一端を示している。当遺跡の各時代遺構がどの場所においても比較的良好に保存されているのは、特に中世以降において盛土による嵩上げが行われているためであり、この結果としてそれまでの生活面は地表下1.5m程下に埋没することとなった。今回の調査では、宇治橋通りとⅣ層上面遺構との関係を確認できなかったが、柱穴が主に宇治橋通り側に集中することは、道路に面する宅地の状況を推測させ、この通りが既に中世段階には成立していた可能性を窺わせる。

また、Ⅰ層火災層は、宇治市街遺跡のほとんどの部分において認められるものであり、江戸前期における大火によって形成されたものであることが理解できる。近世における宇治郷の火災は文献に度々記録されており、最も大きな火災としては元禄10年(1697)に酒多宗有家で失火し、宇治郷の大半を焼きつくした宇治郷大火、通称「お亀の火」がある。宇治市街遺跡の多くの地点で確認される江戸前期の火災層は、この大火によるものと考えているが、今回の調査地付近は、下図に示したように寛文10年(1670)に124戸を焼失させた寛文大火の罹災地に近く、Ⅰ層火災層がこのいずれの大火によるものであるかは不明である。ただし、この火災により焼失した家屋が茶師に関することは遺物から確認できる。



第23図 江戸前期での宇治大火類焼地

### 3. 西浦遺跡(西浦50の1)発掘調査概要

#### A. はじめに

ここに報告するのは、宇治市木幡西浦50の1他において実施した西浦遺跡発掘調査の概要報告である。

西浦遺跡は、宇治市東部北端、木幡池東側平地部に展開する遺跡で、須恵器や瓦器及び陶器類が比較的広い範囲で採集できる。

今回の調査は、葵建設株式会社が当地で計画した宅地造成に伴うもので、2地点において総面積650㎡の発掘調査を実施した。期間は平成2年10月15日より11月8日までを現地調査に費した。

なお、調査にあたっては葵建設株式会社のご協力をえた。記して感謝する。



第24図 調査地位置図(1:5,000)

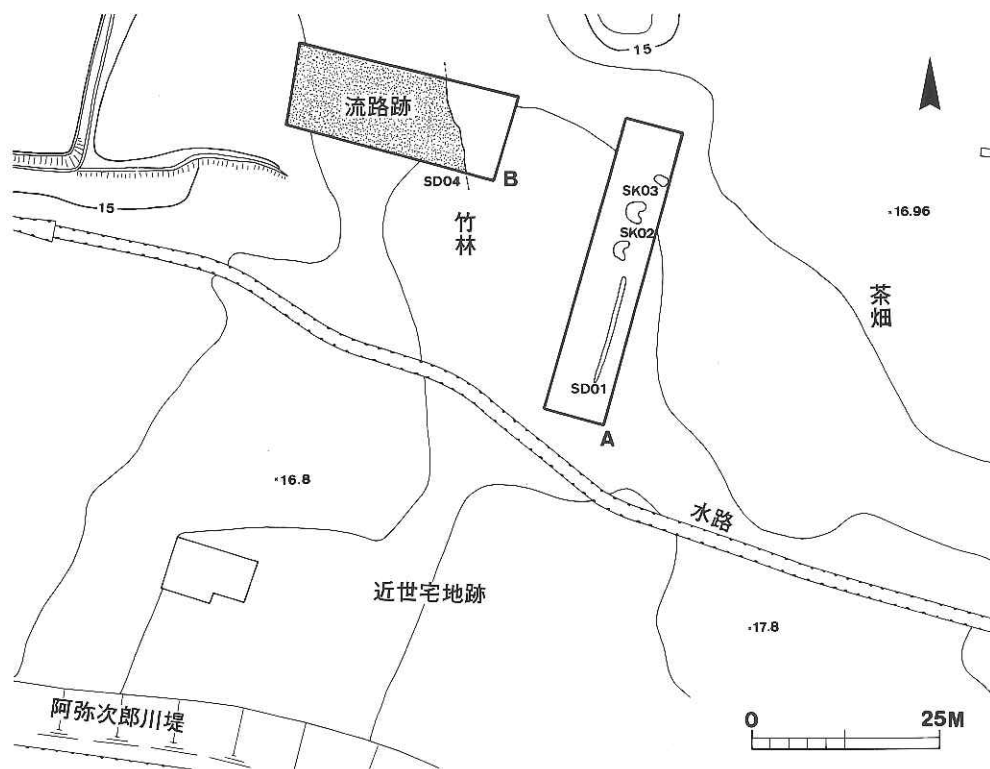
## B. 遺構の概要

調査は竹林の伐採後、A・Bの2本のトレンチ設定より開始した。掘削は、まず表土を重機にて排除し、次に表土下の層厚40cm程の砂層を排除した。この下層に褐色砂層を検出し遺構を認めたので、この面上で調査を行うこととした。また、トレンチ外で深掘りを行い、下層遺構の有無等の確認を行ったが、地表下1.5m程まで砂層が続き激しい湧水に見まわれたため、これ以上の深掘りを断念した。

遺構については、Aトレンチにおいて南北溝SD01と不定形土壙SK02・SK03を検出した。SD01は深さ20cm程の直線溝で、中に拳大の河原石が一面に認められた。SK02とSK03については、状況的に木根痕跡の可能性が高い。

Bトレンチでは、褐色砂層は東側一部のみしか存在せず、西側には砂質土層が直ちに広がっていた。この砂質土層の広がりには旧流路跡と考えられ、SD04と呼称することとした。

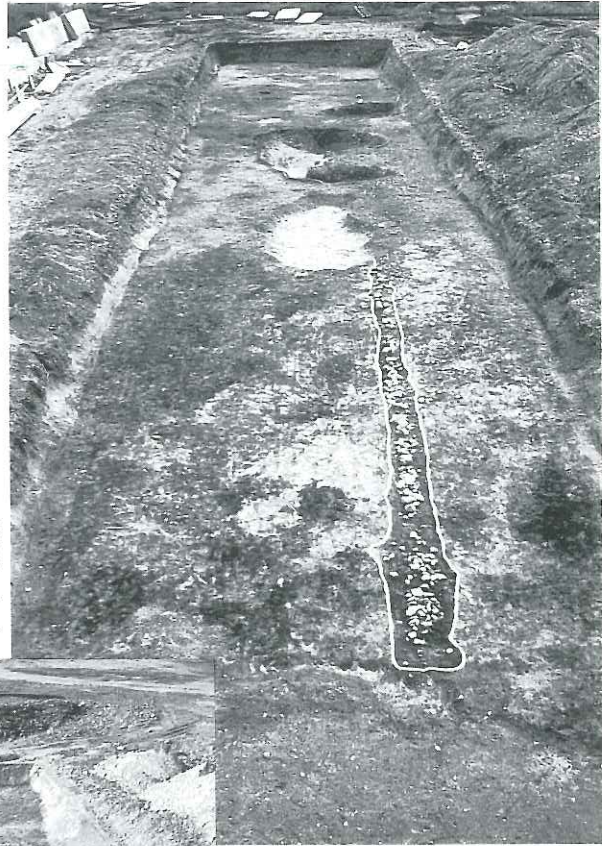
遺物は、表土下の砂層中及び遺構検出面上で一面に散在する状況で出土し、洪水によって運ばれた状況を呈していた。



第25図 トレンチ配置図



第26図 Aトレンチ全景(南から)



第27図 Bトレンチ全景(東から)

### 3. 西浦遺跡(西浦50の1)発掘調査概要

## C. 遺 物

今回の出土遺物は、陶磁器類を中心に整理箱10箱分が出土している。以下にその概要を記述する。また、これらの遺物については洪水によって運ばれたもので、遺構に伴うものはほとんどない。

### (古墳時代の遺物)

6世紀代に比定できる須恵器片や埴輪片が後述する近世陶磁器類に混じって少量出土している。いずれも小片で全形を窺えるものはない。器面に余り磨耗が認められないため、洪水によって付近より運ばれたものであると思われる。

### (近世の遺物)

今回の遺物の中で大半を占めるものは近世陶磁器類であり、他に瓦片・泥面子・銭貨等が出土している。

第28図10～13は土師皿であり、内面見込みに沈線を有すものである。

第28図1～9・14は陶器の灯火具であり、内面に施釉されている。この灯火具は台(1・4・8)の上に灯明皿(2・3・5・6・7・9・14)を乗せるものであり、灯明によって付着する油ススは、灯明皿のみに認められる。また、第28図22・23もランプ形の灯火具であり、23は注ぎ口状部に油ススが付着している。

第28図15～20は陶器の小皿であり、赤褐色を呈するものである。一見土師皿に類似するが、内面に施釉され、中央部に宝珠が描かれている。糸切り底である。

第28図20・21は陶器の壺であり、外底面及び側面に墨書が認められる。

第28図24は唐津系の小皿であり、25は信楽焼の鉄釉四耳壺片である。26・27は陶器の蓋である。

第29図の中で38を除き他は染付の碗である。30・35～37は伊万里系のものであり、他については不明である。38は青磁の盤と思われるものであり、口縁部内側に葉文状の陽刻が認められる。

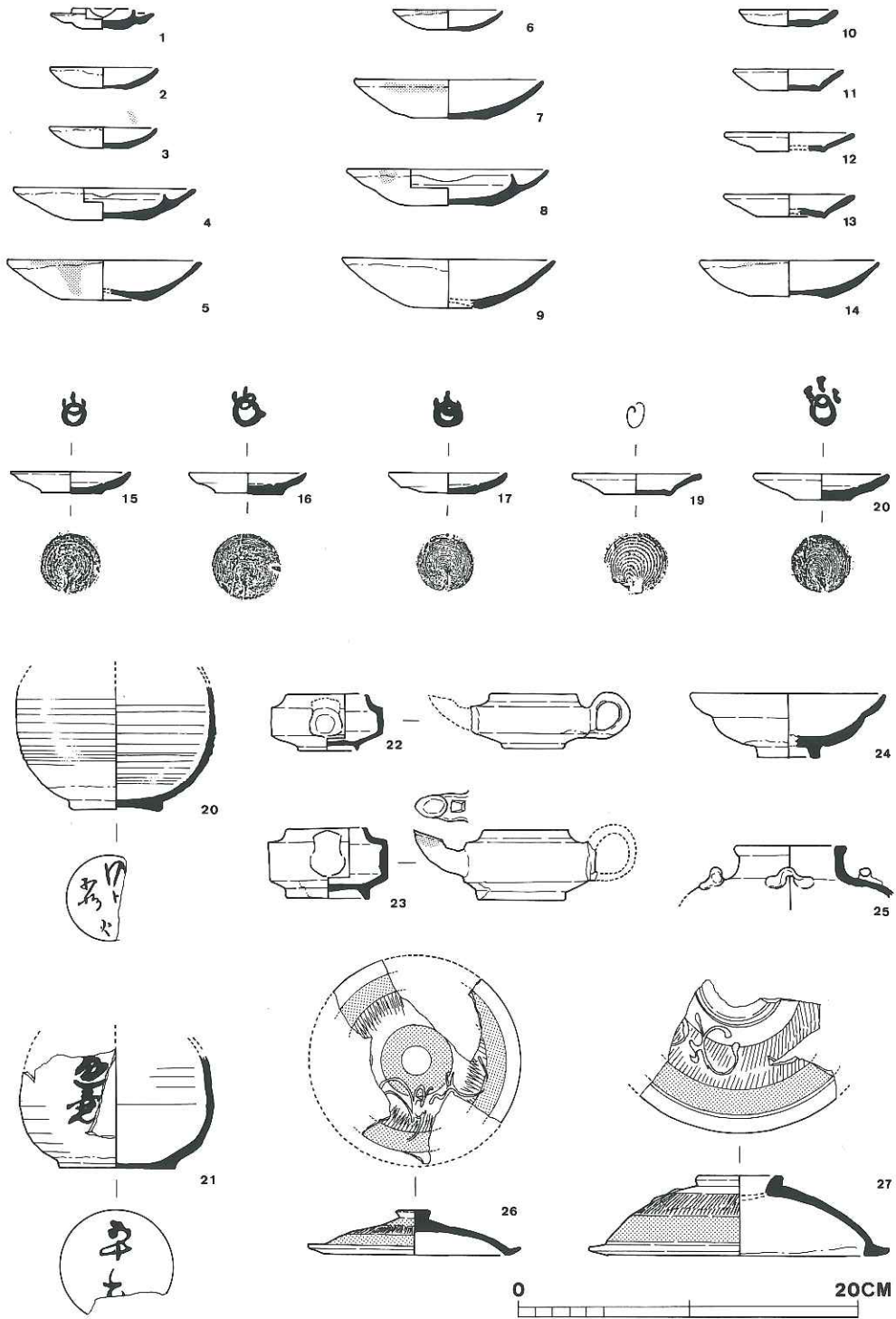
瓦については量的には余り多くないが、すべてが本瓦葺に使用するもので、軒丸瓦については三巴文が認められる。銭貨は「寛永通宝」の一文銭である。

これらの近世遺物については、ほとんどが江戸中期以降のものである。

## D. ま と め

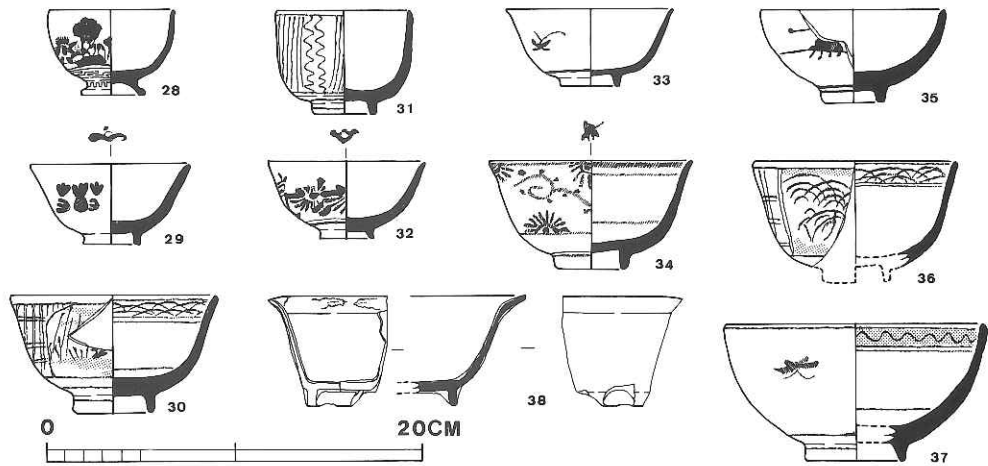
今回の調査の概要は以上のとおりであるが、ここで整理を行いまとめをしたい。まず、今回検出した遺構の年代であるが、これらについては遺構を覆う洪水層に含まれる遺物と遺構

C. 遺 物



第28图 出土遺物实测图(1)

3. 西浦遺跡(西浦50の1)発掘調査概要



第29図 出土遺物実測図(2)

面上の遺物から考えて江戸中期頃のものと考えて良い。遺構そのものは、希薄であり、おそらく近世家屋周囲に広がる耕作地であると思われる。Aトレンチ南側には、土塁を残す近世の宅地跡が認められ、この宅地跡のすぐ南には天井川である弥陀次郎川が西へ流れている。

このような状況を踏まえると、今回の調査で見つかった洪水層や近世遺物については、弥陀次郎川の洪水によって形成された層と、この洪水によって近世宅地跡から流出したものである可能性は高いといえる。

調査地付近については、この洪水層によって旧地形が失なわれているが、東側のやや高い部分や北西方については、表土下に地山が認められ、瓦器片や須恵器片が散布している。西浦遺跡の中心部は、これらの場所である可能性は高い。

## 4. 矢落遺跡(矢落34)発掘調査概要

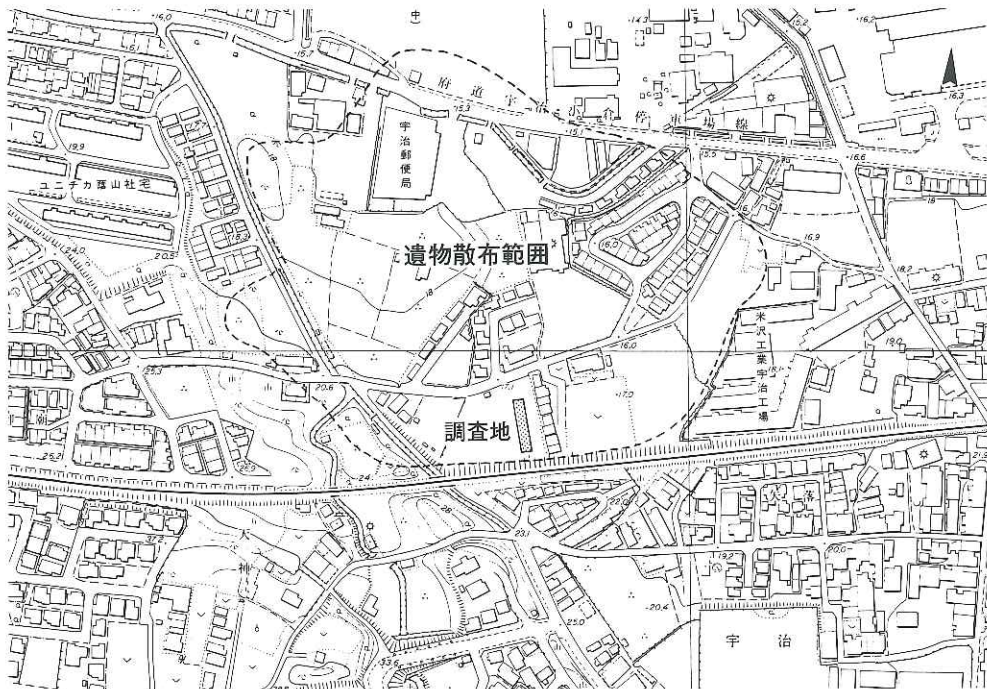
### A. はじめに

ここに報告するのは、宇治市宇治矢落34の2において実施した、矢落遺跡発掘調査の概要報告である。

矢落遺跡は、宇治矢落一帯に広がる遺物散布地で、以前より土器や瓦片が採集されている。また、府道小倉停車場線の工事時には古瀬戸の壺が発見されたといい、平成元年度のフィリップス大学建設に伴う調査では、縄文時代の石器を始め鎌倉時代の土器・木器が見つかっている。

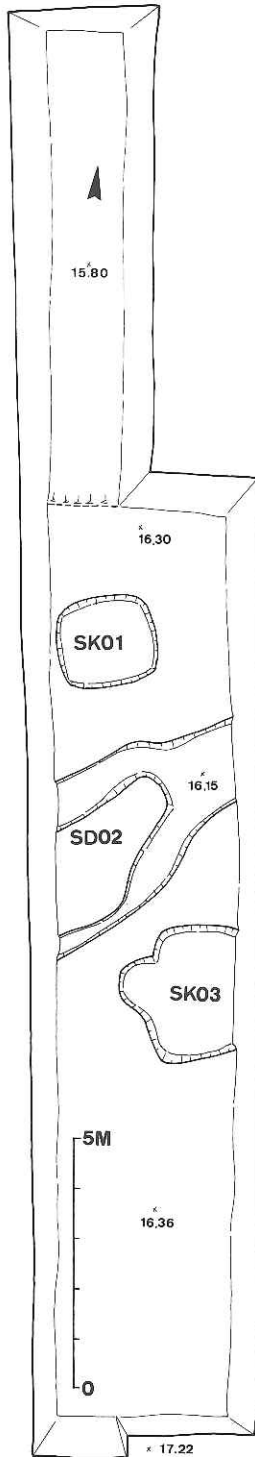
今回の調査は、ユニチカ株式会社が計画したマンション建設に伴う事前調査として実施したもので、調査前は空地であった。現地での調査は、東西4.5m、南北32mの調査区を設定し実施した。最終的な調査面積は130㎡であり、現地での調査は平成2年6月4日から6月26日までを費した。

調査の実施にあたっては、ユニチカ株式会社のご協力をえた。記して感謝する。



第30図 調査地位置図

#### 4. 矢落遺跡(矢落34)発掘調査概要



第31図 調査地全図

### B. 調査の概要

調査はまず表土等を重機で排除することから始めた。遺構面は、盛土や黄燈色の砂質土を概ね1 m程除去したところで検出でき、黄褐色粘質土をベースとしていた。調査地北半部で、下層状況確認のために深掘りを行ったところ、黄褐色粘質土ベース下には砂礫土が堆積し、湧水が激しかったため、それ以上の深掘りを取りやめた。

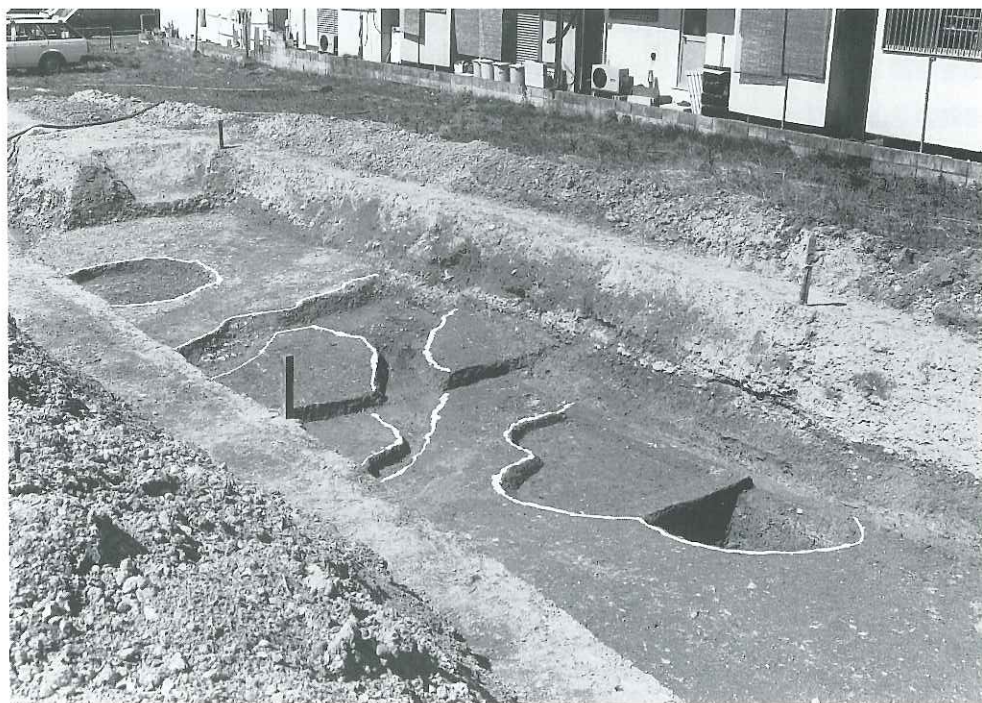
遺構は、調査地中央部において土壙SK01とSK03及び自然流路と思われる溝SD02を検出した。これらの遺構埋土中にはほとんど遺物を含まず、年代については確定できないが、遺構面を覆う土層中には、瓦器の羽釜片や備前と思われる甕体部片等が含まれており、遺構の年代についてもこれらの遺物の示す時代、概ね中世期のものと推測できた。

### C. ま と め

今回の調査地は、調査の状況及び現地地形の状況から判断して、小さな谷地形の中央部分に当ると判断でき、遺構面下の砂礫層や遺構面を覆う砂質土は、この谷に流入し堆積したものと思われる。調査地は地形的には集落等を営む適地と考え難いが、流入土中に遺物が含まれることは、至近に当該期の集落が存在することを示していると考えられることから、付近での開発には十分な注意を必要とする。



第32図 調査地全景(南から)



第33図 トレンチ中央付近(西南から)

## 5. 平成2年度の動向

平成2年度において、宇治市教育委員会が実施した発掘調査等をその原因別に分けると、開発に伴うものと、遺跡の保護・内容確認に伴うものの2者がある。前者を本書が収録している。但し、開発に伴う緊急調査は、開発の内容が遺跡に与える影響が大きい場合は発掘調査として実施しているが、開発面積が少ない場合や余り遺跡に影響を与えないと判断できる場合には、工事実施時に職員がその状況を確認する立会調査として対応している。平成2年度における立会調査は、全市域において約20件余りを実施しているが、特段ここに報告すべき内容のものはなかった。

では、以下に本書が収録しなかった平成2年度における発掘調査等の内容を略記することとしたい。

### (広野廃寺)

広野廃寺は、広野町のJ R奈良線新田駅東側に存する白鳳寺院跡で、国庫補助事業としてその内容確認調査を実施した。

当寺跡は、旧久世郡内の古代寺院の中で唯一宇治市域に含まれるもので、古くに宇治市史編纂に伴って一部が調査され古瓦が多数見ついている。今回の調査では伽藍中心建物の検出を予測して発掘を実施したところ、寺域西限の築地側溝・掘立柱建物・寺域外井戸跡等の寺院関連遺構を始め、下層に7世紀前半の集落を検出した。特に井戸跡からは、寺院廃絶に伴う土器が多量に出土した。これらの土器及び瓦の年代から考えて、広野廃寺の存続時期は、7世紀後半から8世紀中頃の比較的短期間である可能性が高い。

今回の調査では、伽藍中心建物の検出はできなかったが、寺院に関する諸遺構・遺物を確認できたことによって、今まで不明であった当寺跡の内容の一端が明らかとなった意義は大きい。なお、この調査成果は『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第17集』に収録している。

### (池山瓦窯跡)

池山瓦窯跡は、菟道池山の丘陵南斜面においてかつて発見された飛鳥時代の瓦窯跡であるが、窯跡は既に失われ、今回は灰原部の遺存確認調査を国庫補助事業として実施した。

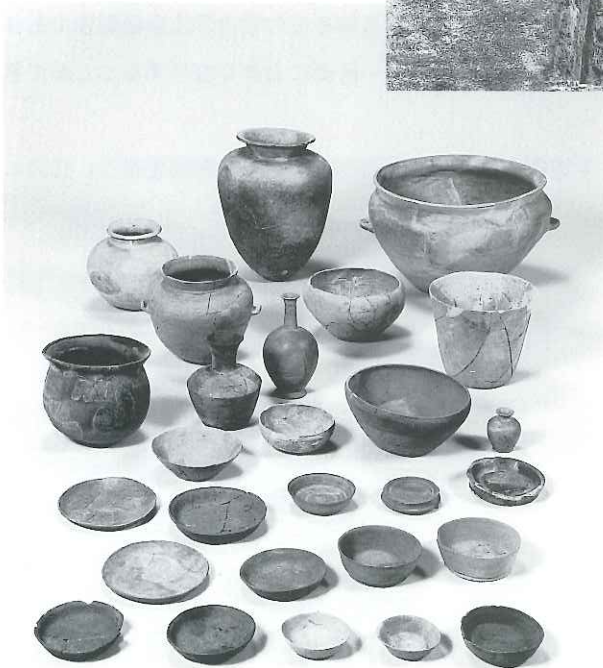
調査の結果、灰原部も後世の土取り等によって消滅しており、残念ながらこの瓦窯跡の実態は不明であるが、かつて採集された軒丸瓦を詳細に調べると、豊浦寺へ瓦を供給していた俵上り瓦窯と同範品の存在することが理解され、豊浦寺創建瓦窯の新たな一例であることが判明した。

なお、この調査成果については、前述の第17集に収録している。





第34図 平等院鳳凰堂前面の洲浜



第35図 広野庵寺井戸内出土土器

## 5. 平成2年度の動向

### (平等院庭園)

平等院は、藤原道長の宇治別業をその子頼通が伝領し、永承7年(1052)に寺としたもので、今に藤原王朝文化の粋を伝える鳳凰堂(阿弥陀堂)は翌天喜元年に建立されている。

平等院庭園は、この建物等と一体となって作庭されたもので、浄土式庭園の範として国の史蹟・名勝の指定を受けている。しかし、往時の状況を今に良く留める平等院庭園も、千年近い歳月の中で度々改修を受けているらしく、作庭当時の姿をそのままには残してはいない事が指摘されていた。

今回、平等院庭園の整備に伴い、鳳凰堂の存在する中島において、地下遺構の状況確認を実施する旨の計画が平等院を中心に進められ、本市教育委員会が発掘調査を担当することとなった。

試掘溝は、堂に直行する形で、前面に3本、背面に2本を設定し、調査を実施した。調査は、総面積50㎡程の小規模なものであったが、平安期の作庭当初の洲浜を各試掘溝で良好に検出するとともに、中世・近世において比較的大規模な改修が行われている事実も確認することができた。また、遺物も瓦を中心に多量に検出され、今まで不明な点が多かった平等院庭園の実相の一端を解明することができた。

今回の調査は、平等院の史蹟・名勝指定範囲内における初めての考古学的発掘調査であり、これによって得られた資料は、今後の平等院庭園の整備・研究に大きく寄与することができると判断している。

なお、本調査の成果については、平等院発行『平等院阿弥陀堂中島発掘調査報告』1991に詳しい。

---

『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』

第 18 集

発行日 平成4年3月31日

発行 宇治市教育委員会

〒611 京都府宇治市宇治琵琶45番地

製作 河北印刷株式会社

---

